

やめたいと思ったことは 何度も。でも、 試合の後にはいつも、 頑張っ て よかったなって。



大学1年次の7月、関東大学女子トーナメント、ミニマム級2回戦。前日のリーグ戦を終えた男子部員みんなが疲れているなか応援してくれ、敗れたものの、いい思い出として残る。



体育会ボクシング部 前主将 **三田さくらさん**
商学部4年

元WBC世界バンタム級王者の山中慎介さん（H17商卒）をはじめ、パリ五輪出場の前田周大さん（法4）など、錚々たる選手を輩出してきたボクシング部。その歴史において初の女子部員にして、主将を務めた三田さくらさん。闘争心溢れるタイプを想像して話を聞くと、ちょっと違う。

「痛いし怖いし、ボクシングをやめたいと思ったことは何度もありますよ」とのコメント。では、そんな痛くて怖いボクシングを続けたモチベーションは？

「勝てたら嬉しいし、たとえ負けても周りからかけられる声が嬉しくて、試合の後にはいつもすっきり、頑張っ
てよかったなって思うんです」

父親が運営するジムで、姉兄と一緒に幼い頃からボクシングを始めた。高校は強豪、駿台学園高校。レベルの高い練習についていくため、帰宅後も自主練に励んだ。

そして、旧知の小坂則夫監督からの誘いを受け、専修大学に進学。しかし、たった一人の女子部員として、最初は周りとの壁を感じた。それを救ったのが、他の部員からかけられた一言だった。

「女子だからって関係ない、仲間だろ」

すっ
と気持ちが楽になった。徐々に周りとの壁はなくなっ
ていった。

「スパーリングは本気で倒すつもりでやってきました。それくらいでないと、みんなの練習にならないので。体力も技術もある男子との練習のお陰で、女子相手の試合ではあまり痛いと思わなくなったかな（笑）」

3年次の半ばから主将を務めた。試合で結果を出せていないので、「私でいいの」という思いもあったが、挨拶や礼儀など、行動の規律を大切にチームを率いた。嫌われる覚悟をもって、時に厳しいことも言ってきた。

最後の試合は、両親はもちろん、姉兄も来てくれた。「普段はあまり話さないお父さんだけど、試合では的確なアドバイスを送ってくれ、それが本当に心強かったです。試合後は、お母さんの胸に飛び込んで泣きました。お姉ちゃん、お兄ちゃんも応援に来てくれて、みんなに支えられてきたんだってことをすごく感じました」

ボクシングを引退した今は、好きな物を食べ、好きな時に友達と遊びに行けるのが嬉しいという。そして、爪にはネイルアート。これまで我慢してきたことを、思う存分楽しんでいる。

「ボクシングからは精神力も体力も、人として大切なことを教えてもらいました。それを糧に、卒業後はフィットネス企業でインストラクターになります。体を動かして、人の幸せにつながる仕事。今から楽しみです」